

発行所
株式会社 中外日報社
©中外日報社2015

京都本社 〒601-8004 東京都本社 〒113-0033
京都市南区東九条山王町9 東京都文京区本郷4-9-13
電話 (075)671-3211(代) (03)3816-4721(代)
FAX (075)671-2140 FAX (03)3811-5222
http://www.chugainippoh.co.jp
Eメールhenshu@chugainippoh.co.jp



購読料
一月 三九三円
三月 一〇〇〇円
半年 一八〇〇円
一年 三三〇〇円

設計事務所開設しました
なんでも いつでも どこへでも
伝統を未来につなぐお手伝い
特定非営利活動法人
日本伝統建築技術保存会 設計事務所
事務局 522-0004 滋賀県彦根市島居本町1980-2
(T)0749-23-6185 (F)0749-26-4767
http://www2.ocn.ne.jp/~nidenken

モニUMENTを前に多くの児童・教職員が犠牲となった大川小の方向を示す後藤住職



「深層ワイド」

問われ続ける宗教の役割

切れ目ない被災地支援の現状



「心の相談室」の活動を語る

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から11日で丸4年。この間、被災地での宗教者による慰霊や追悼、被災者支援などの様々な活動に注目が集まるとともに、社会における宗教の役割が問い直され続けてきた。遺族に対する弔いから悲嘆ケアまで、一貫した切れ目ない支援を行ってきた。遺族の相談室」の活動を踏まえ、2012年に東北大学実践宗教学者附講座を開設し、公共空間での心のケアを行う「臨床宗教師」養成に取り組んでいる。その設立を続けている。その設立

応じた宗教者の未来像として、ターミナル(終末期)とグリーフ(悲嘆)のケアへの関与を提案する。

- ▶ 宗祖350年遠諱法要の事務局を開設 黄檗宗 = 2面
 - ▶ 終戦70周年事業で議論白熱 浄土宗宗議会 = 3面
 - ▶ 〈提言〉谷山洋三氏の「臨床宗教師になるには」 = 4面
 - ▶ 5度目の春へ—東日本大震災②= 5面
 - ▶ 北野天満宮の「飛梅」 クローン増殖に成功 = 8面
- ◆〈地域〉は休みました

きよつこの紙面から

仰に基づいて祝意をもつて調和をもたらす。ところが他でもない宗教者の役割であり、今後の支援の在り方については

ここに来れば「あの人」に会える 被災地望む「祈りと供養の標」

石巻市の観音寺「鎮魂の桜の森」

「ここに来れば会える」と、手を合わせ、祈ることのできる場所にした。曹洞宗常盤寺(岩手県一関市)の後藤泰彦住職(64)は、子どもの頃に駆け回って遊んだ生家の曹洞宗観音寺(宮城県石巻市)の裏山に「鎮魂の桜の森」を整備している。東日本大震災の記憶を後世に伝えるとともに、被災児童や都市部の

石巻市は、津波被害の大きかった岩手県久慈市と福島県いわき市との中間地点に当たる。また石巻地域では、震災による全犠牲者の3分の1に当たる約6千人が亡くなった。扇形のモニUMENTには被災地域の方向が記されており、「ここに祈り」がここに届く。後藤住職は「ここに祈り」がここに届く。後藤住職は「ここに祈り」がここに届く。

見逃さないで「危険サイン!!」知らなかったでは済まされない

借地のことで困ったら... **110番!!**

お寺の借地

BBテイシャク ☎ 0120-818-709

株式会社ブルーボックス テイシャク 492-8145 鹿児島県鹿児島市正明寺二丁目15番4号

山の一部は墓地区画でもあるためモニUMENTの内部に納骨も可能で、「自分が死んだら行き場所がない」と不安視する震災による生活困窮者には、無料で開放する。また樹木葬を行い、「死にゆく人が生きる人を支える」ような仕組みをつくること、被災地の子どもたちの教育支援に役立てたい考えだ。

IT時代の宗教を考える

好評発売中!

執筆者 井上順孝 日平勝也
浅川泰宏 吉永敦征
田村貴紀 佐藤杜広
弓山達也 黒崎浩行
小池 靖 永崎研宣

編者 井上順孝 国学院大学教授
中外日報社刊・法蔵館発売

- 好評の本紙連載に補筆し、新書判サイズの一冊に
- バーチャル空間の宗教を分析
- ITという切り口からみた現代宗教論

定価 本体 1,000円+税

株式会社 中外日報社 営業局出版事業部
〒601-8004 京都市南区東九条山王町九番地 TEL 075-682-1625 FAX 075-682-1722

株式会社 法蔵館 営業部
〒600-8153 京都市下京区正面通烏丸東入 TEL 075-343-5656 FAX 075-371-0458

人類の平和と幸福を開く不滅の原典

新編 日蓮大聖人御書全集

創価学会版 ★B6判

■合成皮革——— 定価 3,301円(税抜)

聖教新聞社 〒160-8070 東京都新宿区西新宿18 TEL.03-3353-6111(大代表) http://www.seikyoonline.jp

「心の相談室」と被災地の4年を語る

どう働くかを考える試金石に



鈴木 岩弓氏

「心の相談室」は、被災直後の仙台市宮城野区の地元宗教者の慰霊活動を契機に、その後は医療者や研究者らを加え連携して被災者の心のケアを行ってきた。こうした公共空間における超宗派での活動の実績やニーズを踏まえて設立されたのが、東北大学の臨床宗教師養成講座であり、「心の相談室」も運営に協力している。

—これまでの活動の総括と意義や教訓は。

鈴木 1995年の阪神・淡路大震災との違いが大きい。当時は「宗教者は何をしているんだ」といった声もあったが、東日本大震災では宗教者の活動が顕在化している。

宗派・超宗派的な関わりの中でも実現してきた。宗教者災害支援連絡会

宗派・超宗派的な関わりの中でも実現してきた。宗教者災害支援連絡会

者合同慰霊祭などを経て実現したことは重要だ。川上 震災では、宗教者も一般の人も全ての人

かつてキリスト教ではジョン・ヒック（プロテスタント神学者）が諸宗教者の対話を盛んに語り、ブームになったことがあったが結局うまくいかなかった。知識人の中で完結し、互いの競争関係は意図的に無視されていた。

苦しいことが出発点だったから、それぞれの違いを残したまま一緒にやれたと思う。むしろ各宗教の包容力や苦しみへの向き合い方を競うような形で協力できたことは幸いだ。

「どうも日本の社会はおかしいぞ」と考えていた。自殺の問題への対応を始めてから、現代の苦悩に向き合う姿勢ができて、そういった活動の中で川上さんにも出会った。

立ち上がってきた。教団の後ろ盾がなく、とにかく一人の人間として震災と向き合う中で、つながりがあったことはすごく心地よかった。皆、同じような「どうしていいんだ」という苦悩や問いを持ち、その問いを中心につながり集まったのが心の相談室だったと考えている。

（宗援連）や心の相談室もそこを志向している。超高齢多死社会を迎えた日本において今後、公共空間で宗教者がどう動くかを考える一つの試金石となり、その切り口をつくった意義は大きい。

超宗派の活動が、金田さんのカフェ・デ・モンクや川上さんの身元不明

ジョーン・ヒック（プロテスタント神学者）が諸宗教者の対話を盛んに語り、ブームになったことがあったが結局うまくいかなかった。知識人の中で完結し、互いの競争関係は意図的に無視されていた。

「どうも日本の社会はおかしいぞ」と考えていた。自殺の問題への対応を始めてから、現代の苦悩に向き合う姿勢ができて、そういった活動の中で川上さんにも出会った。

活動にとって良かったのは身軽だったこと。何の制約もなくすぐに反応でき、隅々まで目配りができた。そういった高野聖のような宗教者がどんどん出てきて、ムーブメントを起してほしいと希望している。

鈴木 「信仰」のより組織化されたものが「宗教」だといえる。臨床宗教師への講義で民間信仰を扱っているが、文化人類学者の梅棹忠夫氏の考え方で説明している。梅棹氏は、宗教の問題をユーザーとメーカーとディラーに分類した。この場合、ユーザーは信者でメーカーは教団、その間を取り持つのがお二人のような宗教者なのだと思う。

祝意をもって調和をもたらし



川上 直哉氏

—宗教者としての立場と二人の人間としての立場のどちらが前面に出たか。

川上 宗教者だから

「政治はしない」「商売はしない」と限定でき、自分の活動をぶれずに定義できた。「信仰に基づいて祝意をもって調和をもたらす」「こそが、政治や商業の人たちとは異なる宗教者の役割だと考えている。

半僧半俗で、大乘仏教からすると理想的な立ち位置にいる。震災があつて悩むうちに、仏典を読み進め、自分の目指す場所として発見した。

宗教者同士のつながりという点では、私は川上さんという人間に好感を覚えている。「どうやって救ったらいいのか」と苦悩している川上さんは、被災地にやって来て知ったかぶりで教を振りかざす人たちは一線を画している。もちろんいろんな宗教があつていいと思うが、研ぎ澄ました人間性がそこにあつたのかと問われている。

鈴木 人間性が研ぎ澄まされた「良き人」であれば、宗教者でなくてもよいという話になってしまつたのは疑問だ。臨床宗教師研修では、対象者として「信徒の相談に応じる立場にある者」としてあり、今、それを外すかどうか議論しているが、私は外すべきではないと考えている。

震災に直面し、長年宗教を研究してきた者として、宗教者でなくとも何かしたいという思いが大きかった時に、心の相談室の事務局を引き受けたいという話を持ち掛けた。人を救えない

鈴木 「信仰」のより組織化されたものが「宗教」だといえる。臨床宗教師への講義で民間信仰を扱っているが、文化人類学者の梅棹忠夫氏の考え方で説明している。梅棹氏は、宗教の問題をユーザーとメーカーとディラーに分類した。この場合、ユーザーは信者でメーカーは教団、その間を取り持つのがお二人のような宗教者なのだと思う。

深層ワイド

動が見えるようになった



震災

金田 いつもモデルとして維摩居士を意識している。聖でも俗でもなく

半僧半俗で、大乘仏教からすると理想的な立ち位置にいる。震災があつて悩むうちに、仏典を読み進め、自分の目指す場所として発見した。

宗教者同士のつながりという点では、私は川上さんという人間に好感を覚えている。「どうやって救ったらいいのか」と苦悩している川上さんは、被災地にやって来て知ったかぶりで教を振りかざす人たちは一線を画している。もちろんいろんな宗教があつていいと思うが、研ぎ澄ました人間性がそこにあつたのかと問われている。

鈴木 人間性が研ぎ澄まされた「良き人」であれば、宗教者でなくてもよいという話になってしまつたのは疑問だ。臨床宗教師研修では、対象者として「信徒の相談に応じる立場にある者」としてあり、今、それを外すかどうか議論しているが、私は外すべきではないと考えている。

震災に直面し、長年宗教を研究してきた者として、宗教者でなくとも何かしたいという思いが大きかった時に、心の相談室の事務局を引き受けたいという話を持ち掛けた。人を救えない

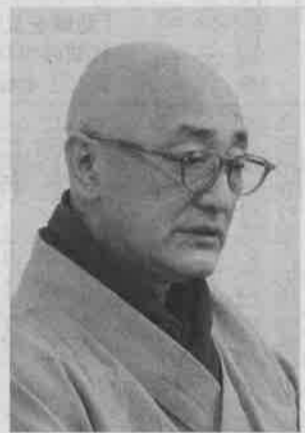
鈴木 「信仰」のより組織化されたものが「宗教」だといえる。臨床宗教師への講義で民間信仰を扱っているが、文化人類学者の梅棹忠夫氏の考え方で説明している。梅棹氏は、宗教の問題をユーザーとメーカーとディラーに分類した。この場合、ユーザーは信者でメーカーは教団、その間を取り持つのがお二人のような宗教者なのだと思う。

宗教者の活



福島県沿岸部では原発事故で立ち入り制限が続き、今なお当時のままの所も多い(浪江町請戸で)

生活の言葉で語る宗教の真理



金田 詩應氏

自分とは別の宗教の宗教者との協働によって得られたものは、金田 すいごいと感心したのはラジオ版カフエ・デ・モンクに呼んだ医師山浦玄嗣さん。「ヨハネによる福音書」の一章1節を、次々と湧き起る出来事・言葉に即応して動いていくという神様からの使命だと解釈してくれた。これは『正法眼蔵』の「現成公案」にも

通じるものとして力強く響いてきた。山浦さんは現地のケセに語に聖書を翻訳した。私も言葉の大切さを知り、気仙沼弁、石巻弁、志津川弁、仙南弁など方言による表現に敏感になり、話せるようにもなってきた。宗教の真理は、生活の言葉で語られると、ぐっと迫るものになる。

川上 よその宗教者としての活動する方がはるかに伸びるか。先日、聖書学者らと議論したが、どうしても、同じ結論に行くはずと先鋭化しがち。それはそれで面白かったが、同じ日であった他宗教との話し合いでは、互いの違いや分岐点から前提で、その上でどんな行動をするかを共に考えることができた。

鈴木 異なる宗教が同じ仕事をすると、この心は重要なことで、この心の相談室の流れが臨床宗教師養成を行っている実践宗教学附講座につな

らと議論したが、どうしても、同じ結論に行くはずと先鋭化しがち。それはそれで面白かったが、同じ日であった他宗教との話し合いでは、互いの違いや分岐点から前提で、その上でどんな行動をするかを共に考えることができた。

鈴木 異なる宗教が同じ仕事をすると、この心は重要なことで、この心の相談室の流れが臨床宗教師養成を行っている実践宗教学附講座につな

何でもない日常が一番の幸せ

4年が経過した被災地の現在の課題や重点的に取り組んでいることは、

金田 月3回程度、引き続きカフエ・デ・モンクを開いている。気仙沼市、石巻市、南三陸町の3カ所で行っているが、震災の犠牲者全体の3分の1弱の人がこの地域の人で、まだまだ死別の悲しみから抜け出せていない人が多い。仮設住宅もたくさんあり、行ったことのない仮設もまだまだある。マラソンレースのようなもので、ゴールにたどり着いて新しい生活を始めた人もいる。そういう人たちは「隣の家に申し訳ないから」と黙って仮設を出ていく。

一番気になっているのは「若い」。被災者を見ると年齢以上に年を取ったと感じる。最初の1年目、2年目は気が張っていたが、どんどん萎んでいった。私たちが家を与えることはできないが、災害公営住宅への2年以内の入居の見通しが立っている。この頃は「婆ちゃん、あと2年で家が建つから、それまで絶対に生きよう」という言葉を最後に伝えるようになった。

「何でもない日常が一番幸せだった」と、震災以前の暮らしを思い出して出すという被災者も多い。失って初めて気付いたことなんじゃないか。また「いのちがあ

あったんだよね」「助けたんだよね」「生かされたんだよね」と、今ここに自分の命があることへの満足でもいろいろ言葉遣いをぼろぼろと漏らすようになった。たぶん人やつたさんものとの別れから得られた、本当の美感なのかもしれない。いわば新しい物語が動き始めている。

川上 感じているのは、外からの支援が終わっていくということ。ある場所話をしに行ったら、いよいよ終わると誤解した。泣きだすお婆ちゃんたちがいた。実際キリスト教関係でも予算がつかず、今年、来年度で終わる支援が多い現状だ。また教会やボランティア

「小さく現場で」の精神で躍動しなければ宗教でない

今後の活動の方向性や展望、求めたいことは、

金田 被災者が仮設を出て、復興住宅に入った後のことが問題となる。仮設やその自治会もなくなった後に、その鉄の扉を開けさせるには今のうちから広く回って印象

底しているのは「現場」であり、求める人がいるからこその行っている。鈴木 臨床宗教師の養成は、やらなければならぬ大きな仕事。東北大での実践宗教学附講座の2年間延長も決まり、

他大学でも養成の試みが始まっている。宗教界を巻き込んだ、日本宗教史上の変わり目ともいえるだろう。臨床宗教師が認められ、受け入れられる社会の実現に、重点的に取り組んでいる。これは

ある意味で社会的使命だと考えている。一方、現在は資格としてではなく研修の修了証を渡すだけの養成課程なので、他大学とも協調した形で標準化も必要になっていくだろう。

今振り返ると、震災はつらいことだったのは間違いないが、宗教の持ついた機能を顕在化させて社会に受け入れさせるきっかけになったのでは。

金田 現実と向き合うためにグルーヴ(躍動)しなければ宗教ではないと、若い信徒には伝えていく。ただし、音楽演奏でグルーヴ感のある人は、きちっとした拍が取れる。宗教者に置き換えるれば、しっかりとした伝統に基づいた修行や感性の深さがなくグルーヴはできない。両方を合わせ

て自由自在に遊戯し、宗教の形を担保して甲斐ようになったことが、次の活動に進める考えの基本になったと思われる。

宗法連は1980年から「各教宗派本山等研修会」を行っており、伊勢神宮やバチカンも含めた他宗教の本山ともいえる場所を見学することで、宗教間対話を成立させていた。他にも機関誌では、ある言葉、例えば「きよめ」について、様々な宗教の立場から意見を交換している。こういったことが超宗教での活動の素地になったのではないかと考えられる。

川上 宗教がちゃんと宗教として機能することが重要だと感じている。政治や経済、学問、メディアなどは異なる、宗教の役割を果たさなければならぬ。それは地味だったり、大事にされないことだったりするかもしれないが、必要だ。

鈴木 「死をどう迎えるか」が身近になり、自分で考える時代になった。これまで仏教寺院では、顔見知りの檀家相手に話をすることが多かったが、家制度が崩壊した現代では、いわばアウェーでの活動が重要となる。臨床宗教師も含め、ターミナル(終末期)とグリーフ(悲嘆)に対応する宗教者が必要となるだろう。